

曲 目 : F. リスト : ソナタ 短調 S.178 R.21 A.179

*F. Liszt : Klaviersonate h-moll S.178 R.21 A.179*



ピアノ : 吉見友貴

2000年生まれ。高校2年在学中に第86回日本音楽コンクール第1位、併せて野村賞、井口賞、河合賞、アルゲリッチ芸術振興財団賞受賞。

これまでに東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団等と共演。

現在、桐朋女子高等学校音楽科(男女共学)3年に在学中。上野久子氏に師事。

## プログラム・ノート

少年時代からピアノのヴィルトゥオーゾとして一世を風靡したフランツ・リスト(1811-86)は、作曲家としてもピアノ技巧を多角的に追求した多数のピアノ曲を書いた。一方で彼は、当時のヨーロッパの新しいロマン主義の芸術運動に呼応し、時代に相応しい革新的な音楽のあり方を真摯に追求した音楽家でもあった。リストが開拓した標題音楽の方法や和声・形式原理の面での新しい語法は、彼が時代について真剣に思索し、それに見合う音楽表現の可能性を探っていった結果であり、そうした彼の斬新さが19世紀後半のヨーロッパ音楽の展開に与えた影響の大きさは測り知れないものがある。

ピアノ・ソナタ短調も伝統的なソナタの様式を新しいあり方に変容し、そこにロマン的な新たな表現方法を追求した革新的な作品だ。この曲が書かれたのはリスト中期の1852年から翌年にかけてだが、ヴァイマルの宮廷楽長の地位にあったこの頃の彼はとりわけ独自の語法に基づく大規模な作風を模索していた。このソナタはまさにそうした新しい形式原理を追求した作品で、全体がソナタ形式を自由に応用した大規模な単一楽章となり、その中にさらに伝統的なソナタ本来の多楽章的特質(アレグロ楽章、緩徐楽章、スケルツォ=フィナーレ)が重ね合わされている。

こうした形式原理にはシューベルトのピアノ曲「さすらい人幻想曲」などの先例の影響があることはたしかである。実際リストはすでにこの「さすらい人幻想曲」をピアノと管弦楽のために編曲もしており、この作品から多くの示唆を得たことは間違いない。しかしその論理を完全に自分のものと化し、全く新しいソナタ原理を生み出した点がリストらしく、大胆な和声法や諸主題を変容しながら循環させていく手法に基づく展開法は、ゲーテの「ファウスト」との標題的関連を指摘する解釈もあるほど、劇的な性格を有している。もちろん一方でピアノの名技的要素も効果的に取り入れられていることはいうまでもない。まさに革新的なロマン主義者リストの多面的な特質が見事に一体化された傑作である。

解説 : 寺西基之(音楽評論家)